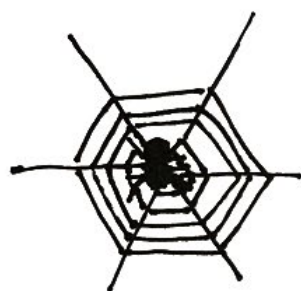


とよ・たち美肌通信

10月号

vol.159



はるか



10月



今月号の とよてち 美肌通信の表紙は
ねこや文鳥が女子と衣装をした絵です。
みんなでハロウィンパーティーをしているのでしょね!!
バットントンやニ重とびが得賞の女子が
描いてくださいました。

ありがとうございます。

院長 せいめ スタッフ一同

に感謝いたします。



「活気」とは「生氣や元氣」とも言える。どう見てもこれらを感じられない人を時々見かけることがある。これには不思議と年齢性別を問わない。

活気は向上心に繋がる。私は本を読むことが多いが、最近よく売れている本の中には共通して「あたり感やそんなに頑張らなくていいんだ」とよー的な論調を軸に展開していく内容の書籍が多い気がする。その筆者が有名人であったり、世間一般からすると人生の成功者と言いきり人達であったりするのだが、私はそれを見て本心から言っているのだろうかと思ってしまう。当人の住い立ちや背景を垣間見ると、かなりの苦勞を背負って歩まれてきた様に思うからである。その石楚が経験値となり成功という今があるのではないだろうかと思えるからである。

「活気応変」という言葉がある。機会を生かして変化に応じる。機会とは物事の起こるきっかけを指す。「機」には良い機もあれば望まない悪い機もある。むしろ後者の方が多数である。これを受動的ではなく能動的に活かしていく事、これが活気応変である。

例えば“絶好のチャンスと思えば”その機を逃さず行重かし、災難の徴候と悟れば”その文才策を時期を逃さず”遂行するというものである。

優れた先人は一重に活気応変に専心した。松下幸之助は戦犯の汚名を着せられ金財産を凍結された。その時氏は、人生にはどうにもならないこともある。逃げ様にも逃げられない、死ぬに死ぬない状況に陥った。その頃であると言われている松下氏の名言の一つがある。「素直の初段になりまはう」と。窮地に陥った場合、そこから這い上がった人は恐らく、これと同様な悟りを体験している様に私には思えてならない。

素直になることはなかなか出来るものではない。だが素直にならなければ“自分は生きていけない。死ぬに死ぬない”どうしようもない機の中から松下氏は、それを天の声と受け止め、素早く文才策を講じていった。活気応変の姿を實現していった松下氏の足跡に学ぶことは多いと考える。

院長, 持